

|| 編 || 集 || 後 || 記 ||

◆第5巻第1号の刊行にあたり、ご多忙中のところ原稿の執筆や査読を快く引き受けてくださいました諸先生方に厚く御礼申し上げます。本号には投稿論文1編、依頼論文6編、依頼稿1編、エッセイ1編、学会の動向5報、著作紹介2件、回顧録資料1件のほかに、年4回開催されている臨床病理検討会の記録（CPC記録）が新しく加わりました。研究フォーラムの内容がより充実することは大変喜ばしいことです。新規に掲載を希望されるものがありましたら編集委員会へご相談下さい。

◆前号までは提出されたカラー写真の中から数枚を選んでグラビアに掲載し、本文中には同じ写真を白黒掲載していました。今回はカラー写真が少なく、また本文中へのカラー掲載の希望もありましたので、グラビアを省きました。印刷の段階でカラーを白黒にするとコントラストのないものになってしまうこともしばしばで、出来上がりを見てガッカリということも少なくありません。論文は後々まで残るものなので「カラーのものはカラーで」が理想ですが、カラー印刷は割高なため限られた予算の中ではそれも少々厳しいのが現実です。今回は印刷会社に特別に勉強していただき経費を白黒掲載とほぼ同じにしてもらいました。ご心配なく。

◆「研究フォーラム」の内容は本学ホームページ上で公開されています。ただし、最近ホームページがリニューアルされたために本誌の所在がわからなくなった方もいらっしゃるのではないのでしょうか。私もその1人で、幾度となくクリックを繰り返し、ようやくサブページ「各種案内」のカテゴリー「その他」にあることを突き止めました。あらかじめ申し上げておきますが、一部分だけを見たいという場合でも、数～数十Mbもの大きなファイル全体を一括ダウンロードしなければなりません。本学の教育研究医療活動を広く知っていただくためにも改善が必要と、本誌の編集に携わりあらためて感じました。

◆本誌の表紙は今井 充氏のデザインによるもので、これまで一貫して「宇宙」がテーマになっています。21世紀に入って土星の探査が本格化し、研究者たちは地球生命誕生の謎に大きく迫ろうとしています。2007年には国際宇宙ステーションに日本の実験棟「きぼう」が取り付けられ、そこでさまざまな実験が行われる計画です。子供の頃、見上げるだけであった無限の空間はいまや医学・生命科学にとって大きな研究の舞台になりつつあります。本誌においても「宇宙」が表紙だけでなく論文として登場する日もそう遠くないかもしれません。

最後に、全体構成から製本に至るまでご尽力をいただいたササキ印刷の皆様に感謝いたします。

(H.T)

表紙解説

1997年10月、土星に向けて放たれた探査機「カッシーニ」が6年8か月、35億キロメートルの旅を経て、2004年7月1日、土星に到着（周回軌道に入る）しました。周回機は4年半をかけて、土星本体やその衛星を詳しく探査します。さらに、突入機（プローブ）「ホイヘンス」が2004年12月に本体から切り離され、2005年1月14日（日本時間）タイタンに突入、着陸に成功しました。因みにカッシーニは、土星の輪にすき間があることを発見（1675年）した天文学者であり、また、ホイヘンスは、タイタンを発見（1655年）した科学者です。

土星は、太陽系の太陽に近い方から6番目の惑星であり、太陽系内で木星に次いで大きい、ガスを主成分とする惑星（ガス惑星）です。直径は地球の約9.4倍、質量は約95倍、中心に岩石の核を持ち、その上に液体金属水素の層、分子水素の層を持ちます。見た目の大きな特徴として、惑星の周りに輪（環）があります。この輪はシリカや酸化鉄、氷の粒子などで構成されており、粒子は細かい塵状のものから、小さな自動車程度の物まであります。タイタンは土星衛星31個のうち最大。科学者達はその大気が初期の地球に似ていると考え、地球上の生命がどのようにして生まれたかを探る手がかりになるのではないかと見えています。

これらの測定データを地球に送信するのに84分を要します。光（電磁波）で1時間以上かかるのです。とてつもない距離を旅し、針の穴を通すほどの精度で目的地に到達させる技術力とそれを成功させる地球人の「宇宙にかける思い」にはただ驚くばかりです。ところで、カッシーニには、世界81か国の市民61万人のサインを記録したディスクが搭載されています。これらは、土星旅行の夢を託そうとNASAの公募に応じた人々のサインです。このなかには、カッシーニの子孫のサインも含まれているとのこと。人類の文明の象徴でもある「文字」が土星のリング上を回っているのです。まさに、衛星タイタン（左上）を従え、太陽（右上）の光に照り映えるリング（講座名）をかぶった土星（右下）なのでした。

整形外科学講座 今井 充